2014年度授業改善研修参加レポート　　所属（短期大学部）　氏名　森川竜哉

「研修会等名称」
2014 年度　第 20 回 FD フォーラム
（主催団体：公益財団法人 大学コンソーシアム京都）

場所：同志社大学　今出川校地
期間：2015 年 2 月 28 日～3 月 1 日

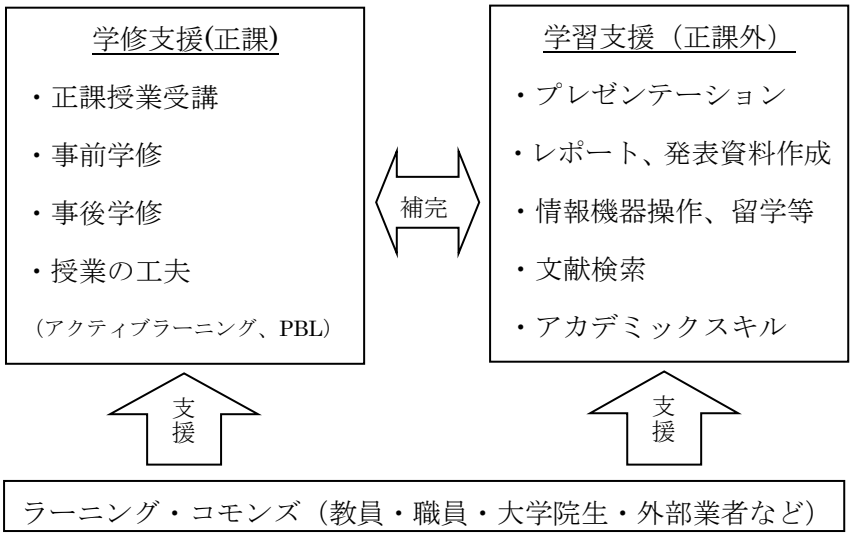
１．研修の内容

今回の研修において、以下の 2 点について理解を深めた。

(1) 学生の学修支援に関する理解

「学修」と「学習」の境界を明確にすることは困難ではあるが、学修は「正課」の教育プログラムであり、学習は「正課外」の教育プログラムであると指摘できる。大学においては、学修も学習も支援すべき対象であり、今後の大学教育の充実を図る要点でもあると思われる。2012 年の『質的転換答申』においても、「学生には事前準備・授業受講・事後展開を通して主体的な学修に要する総学修時間の確保が不可欠である。一方、教育を担当する教員の側には、学生の主体的な学修の確立のために、教員と学生あるいは学生同士のコミュニケーションを取り入れた授業方法の工夫、十分な授業の準備、学生の学修へのきめの細かい支援などが求められる」と述べられており、これらの支援を充実させるためには、ハード・ソフトの両面からの環境整備が必要である。その取組事例として、立教大学経営学部のリーダーシップ教育や同志社大学のラーニング・コモンズでの取組が紹介された。これらの取組成果として、在学中の教育効果が期待できるだけではなく、学校から社会・仕事へのトランジション（移行）の視点からも、高く評価ができるとの報告がなされた。

【同志社大学のラーニング・コモンズ】



(2) キャリア教育に関する理解

「キャリア教育」=「就職支援」と理解さている現状への懸念が指摘された。キャリア教育は多くの大学で導入されているが、その教育的意義について、再考する必要があるのではないだろうか。就職状況が大学の入試戦略に大きな影響を及ぼすこともあり、就職実績が高いことがキャリア教育の評価につながっている側面が見られる。しかし、キャリア教育の効果は、単に就職実績への貢献度だけで測定できるものではない。キャリア教育の意義と就職支援の位置付けを明確にすることが重要である。キャリア教育は学生の社会的自立を促進させ、職業人としての基礎的部分の形成を目標とする教育であるのに対し、就職支援は主として卒業時に職に就くための技術的支援である。もちろん、この技術的支援はキャリア教育が目標とする職業人としての基礎的部分の完成度に左右される傾向がある。しかし、それはキャリア教育だけではなく、他の大学教育全般に言えることである。つまり、大学は各学部の特質や学生の資質を考慮し、各大学の教育目標の中にキャリア教育の位置付けとその目標を明確にすることが肝要であり、キャリア教育だけを重視する大学教育の弊害も指摘されていた。また、短期的な就職状況の改善を考えるならば、キャリア教育の中での就職支援ではなく、正課外での集中的な就職支援(事務組織による支援)が有効であるとの意見もあった。

２．研修の成果

成果として、以下のことがあげられる。

(1) 学修（学習）支援の在り方とその重要性や必要性

大学における学修（学習）は学生の主体的姿勢に依存する傾向が強くみられるが、その姿勢を最大限に引き出す努力や工夫が、大学や教員、職員に求められている。特に、大学教員として、最新の教育方法や技術の体得を積極的に学び、授業改善に取組むことは極めて重要である。また、キャリア形成科目を担当していることからも、講義形式の授業だけではなく、アクティブラーニングや PBL の手法を活用した授業デザインを行い、学生の職業人としての基礎的部分の形成を促進させる講義展開を考える良い機会となった。

３．授業への研修成果の反映状況

今後の授業への研修成果の反映について、以下の 2 点を考えている。

(1) 講義展開の見直し

学生の学修（学習）を促進させるためには、綿密に計画された授業デザインが必要であり、事前・事後の学修（学習）を考慮する。特に、事前準備・授業受講・事後展開のサイクルを連動させることで、学生の理解度を高めることを目指す。

(2) 講義手法の質的向上

学内の既存の設備等を効果的に活用することで、アクティブラーニングや PBL による授業展開を拡大する。特に、学生の議論や討論、グループワーク、発表などを積極的に取り入れ、学生相互で学ぶ機会を設定する。また、学年を越えた学びの場を創出する。

以上

学 部 長	学習・教育支援センター委員長	学習・教育支援センター委員会	名古屋教務課長	係